

漢字のうた【師範代養成コース 一段】

1

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは 少し明り
て、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は、夜。月の頃はさらなり。闇もなほ、螢の多く飛び違
ひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行く
もをかし。雨など降るもをかし。

2

秋は、夕暮れ。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、
鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、飛び
急ぐさへあはれなり。まいて雁などの列ねたるが、いと小さ
く見ゆるは いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音な
ど、はた いふべきにあらず。

冬は、つとめて。雪の降りたるは いふべきにもあらず。
霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎ熾
して、炭もて渡るも、いとつきつきし。昼になりて、ぬるく
ゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

ある人、弓射^{ゆみい}ることを習^ウふに、諸^{もろ}矢^やをたばさみて^{まど}的^{まど}に向か
ふ。師^しのい^ワはく、「初^{しよ}心^{しん}の人、二つの矢を持つことなかれ。
のちの矢を頼^{たの}みて、初^オめの矢になほ^オざりの心あり。毎^{まい}度^どただ
得^{とく}失^{しつ}なく、この一^{いっ}矢^しに定^{きだ}むべしと思^エへ」と言^ウふ。

わづ^ズかに二つの矢、師^シの前^マにて、一^一つをおろかにせむと思^シ
は^ワむや。懈^け怠^{だい}の心、みづ^ズから知^エらずとい^エべども、師^シこれを知^エ
る。このいましめ、万^{ばん}事^じにわたるべし。

(兼好法師『徒然草』)

初心者が二本の矢を持つてはならない。二本目をあてにして、一本目をおろそかにするからであ
る。怠^{なま}け心^{しん}というのは、自分では気付かなくても、師匠^{ししやう}は見^ぬ抜^ぬいています。

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす

おごれる人も久しからず ただ春の夜の夢のごとし

たけき者も遂には滅びぬ 偏に風の前の塵に同じ

(作者未詳『平家物語』)